

東日本大震災記念礼拝

神は人と共にいて

2022年3月11日

日本基督教団福島荒井教会

保科 けい子 牧師

聖書：ヨハネの黙示録 21章1節～5節

¹わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。²更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。³そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、⁴彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」

⁵すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。

この礼拝は、様々な形で集っておられる方々と共に、11年前の東日本大震災でお亡くなりになられた方々や行方不明になられた方々に深い追悼の意を表し、また、被災されて今なお困難な中で歩いておられる方々に、主なる神様からの慰めと励ましを豊かにあることを願っておささげしたいと思います。

2011年3月11日金曜日午後2時46分、私は母校の東京神学大学の卒業式で卒業生に「励ましの辞」を述べるために、礼拝堂の講壇の上におりました。学長の告辞の時に大きな揺れが起きました。少し中断の後、式次第通りに進行し、私の「励ましの辞」のときに第二震が来ました。私も少しだけ話を中断し、「本日の卒業式は皆様にとっては生涯忘れられない日になることでしょう。なぜなら、たとえ地の基は震い動くとも主なる神の御言葉は固く立つということを実感なさったと思うからです。」と語り出し、「励ましの辞」を続けました。そのときに心に浮かんだのが詩編46編2節から4節の御言葉でした。式の終了後、宮城県あたりで震度7の地震らしいと聞きました。4時過ぎに最寄りの中央線武蔵境駅の閉鎖された改札口近くのテレビで、名取川を遡る巨大な津波の映像を見ました。特撮映画のようでこの世のものとは信じられませんでした。その後、東京から仙台までのルートを探しながらやっと3月14日月曜日の夜に、照明も薄暗く人通りも少ない仙台の東一番町に帰ってくる事ができま

した。

ところで、2012年度と2013年度の2年間、私は週に2日、キリスト教センターの主事として宮城学院におりました。そこで聞いた2人の学生の話は、今なお忘れることができません。一人は、家が津波の被害に遭い大学の授業料は免除されたけれども、マンションから木造アパートに移り、本来ならば東京の大学生だったはずの専門学校生の弟さんとアルバイトを掛け持ちしながら生活しているということでした。もう一人は、着るはずだった成人式の晴れ着がお祖母様と一緒に流されてしまったということでした。大震災から1年以上を経過し、淡々と自分たちの現状や体験を語られている様子に、宮城学院の関係者だけでもどれほど多くの方々が様々な形で被災されて傷ついておられるだろうか、と思わされました。それに比べて私自身は、震災の当日は仙台にいなかったなのでその揺れの恐ろしささえ体験せず、ほとんど無傷の状態です。日常生活が続けられているという負い目があり、そのことが今でも日々の祈りにつながっています。

2016年4月より福島市に移り住みました。夫が「東北教区放射能問題支援対策室」の活動を始めてから、大震災の地震と津波により発生した福島第一原子力発電所の事故の影響について、自分達自身のこととして考えていきたいという思いがありました。私が6年前に遣わされた福島荒井教会は福島市西部にあります。その関連幼稚園の敷地に設置されているモニタリングポストの数字と、住まいである街中の福島教会の近くの公立幼稚園の敷地の数字は、その当時も今も約2倍の開きがあります。荒井はその日の風向きで放射能汚染を免れたようです。しかし、街中は盆地の底に位置しているので空気が淀み、建物が多いこともあって十分な除染がなされなかったようです。この数年、福島市や相馬市、南相馬市の方々と親しく話をするようになりました。しかし、ほとんどの方は「原発事故」や「放射能汚染」問題には触れません。決して無関心でいるというのではないのです。カタカナで表記される「フクシマ」に生きているがゆえに、今なお深い苦しみと悲しみがあり、語るすることができません。私はこの数年間、その方たちにどれほど寄り添うことができたでしょうか、と問われています。

そして今、この歴史の中で、この地上で、決して許されない出来事が勃発してしまいました。様々な報道に接する度に、耳を塞ぎ、目を覆いたくなります。今この時も、どれほど多くの命が失われ心身ともに傷つく人々が増え続けているかと想像すると、胸が塞がる思いです。しかし、遠く離れている地での出来事ゆえに、私自身は安全圏にいて、多くの人々の悲惨で過酷な状況を他人事としてしか考えることができません。今の時期、キリスト教の暦では「受難節」と呼ばれ、イエス・キリストの十字架の受難の出来事を覚え自分自身の罪を見つめながら過ごすことが求められています。そのことが、私にとっては救いになっています。

大震災後しばらくして、四十年以上も前に母教会の牧師から教えられたパウロ・ティリッヒという神学者の『地の基ふるい動く』と題された説教を思い出しました。第二

次世界大戦後の 1947 年に出版されています。その中で「聖書は常に、世の初めと終わりについて語ってきた。聖書は世の基の置かれる前の永遠について語り、神が地の基を置き給う時について述べ、さらにこれらの基が揺り動かされること、そして世の崩壊について語っている。」と述べています。そして、1999 年に新しく訳し直された結びでは「私どもはたまたま、自分の仲間でも、国家でも、この地上のどこかの部分でも、その終焉を忘れることに成功する者がほとんどないような時代に生きております。なぜならば、今日、地の基が実際に震い動いているからであります。私どもは目をそらさないようにしたいと思います！ 耳も、口も閉じないようにしたいと思います！ おしろ、一つの世界の崩壊を通じて、永遠の巖を、終焉を知らぬ救いを見るようにしたいと思います！」と力強く述べられています。

さて、先ほどお読みいただいたヨハネの黙示録は、天地創造の出来事から書き出されている創世記から始まる聖書正典 66 巻の最後に置かれています。そして、21 章 1 節から 8 節には「新しい天と新しい地」という小見出しがついています。私たちは今日、先ほど取り上げましたように、地震、津波、原子力発電所の爆発事故、国家間の紛争などはもちろんですが、卑近なことでは、新型コロナウイルスの感染拡大などの様々な揺れに数多く遭遇して、その不気味さを実感しています。もし、それらのことが私たち自身にすべてを帰する出来事であるとするならば、誰一人、そのことに耐えることはできないでしょう。しかし、ヨハネの黙示録 21 章 3 節から 4 節では「**見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもの過ぎ去ったからである。**」と「玉座から語りかける大きな声」が聞こえたことと記されています。私たちの主イエス・キリストは「**インマヌエル**」と呼ばれる名をお持ちの方です。その名の意味は「**神は我々と共におられる**」である、とマタイによる福音書 1 章は告げています。ですから、ヨハネの黙示録 21 章 3 節で「**神は自ら人と共にいて、その神となり**」と語られているのは、紛れもなくイエス・キリストのことであるということになります。そして、そのお方は様々な困難な出来事に遭遇している一人一人の「**目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる**」のです。そこにこそ、私たちの究極の救いと慰めが示されていることを共に確認したいと思います。